

む事は、いふ迄もなかめり、ちも亦おなじの但異名分類の説には、あなしは只あらし風にて、あらしの轉語、らとな同韻通ず、あらめたなど云べきを、あなめでたといふがごとしとみゆれど、此説もいかゞなり、其故はいかにと云ふに、往し天保十二年の土佐國人漂流記といふものを見しに、其國吾川郡宇佐浦と、幡多郡中の濱との漁人等、あなせといふ風に吹ながされて、無人島に漂着したるよしかけり、こはえをせとこそは訛謬たれ、古き名を傳へたるもめでたく、かつ只あらしには非ずして、辰巳さまに吹める風の異名なる事も明らかなる事、土佐と無人島との地方にてよくえられたり、されど我戎の方の風かといへるは、いまだ宜しと決めたるにはあらねば、例の識者の是正を請ふべく、おろく、こゝにはいひ出つるなり、なほ東國の方言に、いなさといなふ風、くれば、いなさはあなしの訛言にやあらむと、はじめには亥とはおもひたりしが、こは辰巳よりふなきにもあらじか、是はた猶よく考ふべし、又鹽尻卷二十一云、熱田浦人の俗諺に、暴風して雨ふるを、はへと云ひ、巽の風をイナサと呼び、坤の風をナラヒと云とあり、いなさは東國と同じけられど、ならひは違へり、東國に云ならひは乾風なり、

〔和漢三才圖會天象三〕船起風 東坡集云、梅雨既過、颯然清風彌旬、歲々如此、潮人謂之船起風、此時海

船初廻、此風自海上與船俱至爾、按、船者海中大船、今市舶也、趕者追也、日本海上亦然、梅雨天、雲中

多有西風、俗云久呂波惡梅雨既過、天晴、多有東風、俗云志良波惡、船趕風是乎、

〔萬寶鄙事記占六〕天氣三月には西風久しくふく、是を三にしといふ、七月十五日の前後は、かならず北風久しく吹、是を俗に益北益北と云、夏秋の頃、東風久しくふく、是をひかたひかたこちといふ、數十日

吹事有、

〔烹雜の記前集上〕多湊ぶり 佐渡の方言に、風は東より吹を山瀬といふ、辰のかたより吹を出し

といふ、巳より吹をうちといふ、南をくだり、未より吹をわかさ、申より吹をひかた、西を眞西、戌より吹を下西、亥より吹をたば、北は正、丑より吹をあひ、寅より吹を中の手といふ、これをえる歌